

障害を扱う視聴覚作品における表現の違いが
障害のある人に対する心理的態度に及ぼす効果

古長 治基・丸尾 百輝

The Effect of Differences in Representation in Audiovisual
Works Addressing Disabilities on Psychological Attitudes
towards People with Disabilities

KOCHO, Haruki. and MARUO, Momoka.

大分大学教育学部研究紀要 第47巻第2号

2026年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 47, No. 2, March 2026

OITA, JAPAN

障害を扱う視聴覚作品における表現の違いが 障害のある人に対する心理的態度に及ぼす効果

古 長 治 基*・丸 尾 百 輝**

【要 旨】 本研究では、障害を題材とした視聴覚作品における表現の違いが障害のある人に対する心理的態度に及ぼす効果について検討した。大学生 40 名を 2 群に分け、障害のある人を感動的に表現している作品と、日常場面を自然に表現している作品のいずれか一方を視聴させた。その上で、視聴前後での障害のある人に対する顕在的態度と潜在的態度の変化を、質問紙と IAT (Implicit Association Test) を用いて比較した。その結果、感動的な表現であっても自然さを重視する表現であっても、顕在的態度にポジティブな影響が示された。一方、潜在的態度については表現の違いに関わらず、視聴前後での影響は生じなかった。それぞれの表現によって生じた当事者へのイメージは、どちらも当事者への心理的態度をポジティブに変化させることが示唆された一方で、動画視聴のみでは潜在的態度の変化には至らない可能性が考えられた。

【キーワード】 障害 感動ポルノ 顕在的態度 潜在的態度 IAT

I 問題と目的

内閣府が実施した障害者に関する世論調査によると、世の中には障害のある人に対して、障害を理由とする差別や偏見が「あると思う」「ある程度はあると思う」と回答した人の割合が全体の 88.5%を占めており (内閣府, 2023)、障害のある人に対して差別意識や偏見をもつことは現代的課題であるといえる。このような差別や偏見を取り除くためには、障害について適切に理解を深める経験を積みかさねていく必要がある。障害について知識を得る経験の一つに、ドラマやドキュメンタリーなどの障害を題材とした視聴覚作品の視聴が挙げられる。近年コンテンツのグローバル化やストーリーミングプラットフォームの普及により、視聴覚作品の影響力はますます増大している。これらの作品は普段障害のある人と接する機会のない人にとって、障害のある人に対するイメージを形成する上で一定の影響を与えると考えられる。しかし、障害を題材とする視聴覚作品については、障害理解の観点から問題が指摘されている。Stella

令和 7 年 10 月 29 日受理

*こちょう・はるき 大分大学教育学部発達科学教育講座 (特別支援教育)

**まるお・ももか 大分県立中津支援学校

Young は 2014 年に TED (Technology Entertainment Design) のスピーチの中で「Inspiration Porn (感動ポルノ)」という言葉を用いて、障害のある人を感動的に表現することの問題を提起した (Young, 2014)。映画とテレビにおけるステレオタイプの表現についてのレビューでは、多くのメディアで障害に関するステレオタイプの表現が見られ、障害のある人とない人の二項対立を強調している点や、ドラマによるストーリーに焦点が当てられ、模範的であったりスーパーヒーローとして描かれるのではなく、ただ存在したいと願う障害のある人の日常生活には焦点が当たらないという点が指摘されている (Gallego, Ferreira, & Arias-Gago, 2025)。日本でも「感動ポルノ」は新聞やテレビなどの様々な媒体での障害者表象の問題として議論されるようになっており (川野, 2024)、24 時間テレビなどのコンテンツについて批判的な意見も見られる。一方で、例えば聴覚障害のある人に対する態度変容の研究では、共感や感動といった情緒的反応が強く生起するコンテンツを視聴することで、拒否的態度が低下したとする研究も見られる (徳田, 1990)。障害を感動のための道具にするという視点そのものへの批判は多く存在するものの、実際に障害をテーマに感動的な表現を多用するコンテンツが、視聴者の障害のある人に対する態度にどのように影響を及ぼすのかについて、感動的な表現を用いず、より日常成果に焦点を当てたコンテンツと比較検討した研究は存在しない。

障害のある人に対する態度を測定するにあたっては、無意識的・無意図的な態度である潜在的態度の測定も重要であるとされている (栗田・楠見, 2014)。潜在的態度とは、その態度が測定されていることに意識的に気づかない指標を用いて測定された間接的な態度のことである。質問紙などで測定される顕在的態度は、故意に回答を変化させることが容易であり、社会的に望ましいとされる方向へと回答が傾く可能性があり、障害のある人に対する態度研究では、様々な潜在指標が用いられてきた。その中でも、潜在的態度を測定する主要な方法としてよく用いられている潜在指標の 1 つとして IAT (Implicit Association Test) がある (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)。IAT は、あらかじめ決められたカテゴリーに単語あるいは画像を素早く正確に分類することを参加者に要求する課題であり、偏見やステレオタイプといった社会的にセンシティブな態度の測定として予測力が高いことも示されている (Greenwald, Poehlman, Uhlmann, & Banaji, 2009)。

IAT を用いた障害のある人に対する態度の変容についてはいくつかの研究が報告されている。例えば林・岡田 (2020) は大学の講義による障害理解の効果を検討しており、潜在的態度に関して、障害理解教育実施前に比べ、障害理解教育実施直後はネガティブになるが、障害理解教育実施 1 か月後になると障害理解教育前よりも発達障害に対する態度はポジティブに変容したことを示した。また、自閉スペクトラム症児の親とそうでない親を対象に、IAT を用いた実験では、オンライン教材視聴前と視聴後で、自閉スペクトラム症児を持たない親の群において、潜在的なネガティブ態度が大幅に減少したと報告されている (Dickter, Burk, Anthony, Robertson, Verbalis, Seese, Myrick, & Anthony, 2021)。以上のように、IAT は社会的望ましきによる影響を考慮した態度を測定するために用いられており、障害というテーマを扱う際に、社会的望ましきの問題を回避しつつ、予測力が高いという点で有用な尺度となり得る。

そこで、本研究では、障害のある人を感動的なものとして表現している作品と、当事者の意見を踏まえて、過度な表現を控えた作品では、視聴前後の心理的態度の変容に違いがみられるのかについて明らかにすることを目的とする。ここで言う心理的態度とは、自分が障害のある人と関わることを想定した際に生じる意識に基づく態度のことである。また、その際、顕在的

態度と潜在的態度を合わせて測定することで、障害のある人に対する心理的態度を多面的に測定する。なお、本研究では、Young (2014)、好井 (2022) を参考に、感動ポルノを「障害のある人の姿を過剰に感動的に描くことにより、健常者が障害のある人に対して、憐みや感動、称賛といった情緒的反応を引き起こすこと。」と定義する。

II 予備調査

1 目的

研究で用いる視聴覚作品の内容的妥当性を検討することを目的とした。

2 方法

1) 調査協力者：X 大学で特別支援教育を専攻している大学生 14 名（男性 4 名、女性 10 名、平均年齢 19.9 歳、SD = 1.17）から協力を得た。

2) 調査時期：2023 年 6 月から 7 月にかけて実施した。

3) 視聴覚作品：本研究では『「お涙頂戴物語」vs「当事者の声を可能な限り反映した動画」』という視聴覚作品を使用した。この作品は一人の筋ジストロフィーのある人を対象とした、2 つの動画によって構成されている。2 つの動画の内容は基本的には同一（筋ジストロフィーについての説明、小中学校での経験談、ヘルパーによる介助など）でありながら、1 本目（作品 A）は悲しげな BGM や厳かなナレーションを用いて感動的に表現されており、2 本目（作品 B）は明るめの BGM と共に当事者とヘルパーの他愛ない会話の様子なども編集に加えられている。動画制作の目的も、テレビ番組で用いられるような表現について検討することであり、本研究で使用する視聴覚作品に適していると考えられた。動画制作の責任者に作品使用について許諾を得たのち使用した。作品 A は約 11 分、作品 B は約 14 分の動画であった。

4) 感動的な表現の評価：作品 A および作品 B の視聴後に、①「障害のある人が、大変な思いが伝わりやすいように描かれている作品であると思う。」②「BGM や演出が、視聴者の感動を誘発させる作品であると思う。」③『「すごい」、「頑張っている」等称賛したくなるような作品であると思う。』④「苦労について同情してしまうような作品であると思う。」の 4 項目について「そう思う」「まあまあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の 4 件法で回答を求めた。各項目は感動ポルノの定義をもとに、第一著者と第二著者で協議の上決定した。

5) 手続き：調査協力者 1 名又は複数名を対象に作品 A と作品 B を視聴させた。その後、それぞれの動画について質問紙への回答を依頼した。作品 A と作品 B の視聴順序についてはカウンターバランスを取って実施した。

3 結果

4 項目の得点の平均値は、作品 A が 3.66 (SD = 0.30)、作品 B が 2.43 (SD = 0.79) であった。対応のある t 検定を行った結果、有意な差が得られた ($t(13) = 5.49, p < .001, d = 1.47$)。

4 考察

作品 A の感動的な表現の評価は非常に高く、作品 B と明確に差が見られたことから、作品 A は感動ポルノの要素が多く含まれた動画であると判断した。また、作品 B は平均値が得点範囲

の中央をわずかに下回っており、作品 A とも明確に差が見られたことから、感動ポルノの要素があまり含まれていない動画であると判断した。以上より、本作品は、本研究で用いる視聴覚作品として妥当であると判断した。

Ⅲ 本調査

1 目的

障害のある人を取り上げた視聴覚作品において、感動を喚起するよう編集している作品 A と当事者の意見を踏まえ、自然な様子を多く取り入れるよう編集している作品 B では、視聴前後で心理的態度に変化がみられるのかについて明らかにすることを目的とした。

2 方法

1) 調査協力者：X 大学に在籍する、特別支援教育を専攻していない大学生 40 名から協力を得て、2 つのグループに分けて実験を行った。以下、作品 A を視聴したグループを感動表現群、作品 B を視聴したグループを自然表現群とする。感動表現群の調査協力者は 20 名（男性 8 名、女性 12 名、平均年齢 20.6 歳、SD = 1.36）であった。また、自然表現群の対象者も 20 名（男性 7 名、女性 13 名、平均年齢 20.3 歳、SD = 1.38）であった。

2) 調査時期：2023 年 9 月から 11 月にかけて実施した。

3) 顕在的態度：顕在的態度を測る尺度は、渡邊・青山・稲富（2016）が作成した「障害児・者に対する態度尺度」を参考にした。渡邊ら（2016）は障害児・者に対する態度として、「統合教育」「関わりの当惑」「関わりの回避」「特別な能力」「特別視」の 5 因子に分類している。このうち「統合教育」は教育的な価値観を表す側面が強く、「特別な能力」は障害のある人へのイメージを表す側面が強いことから、本研究で扱う心理的態度に合致しないと考えられた。また、「特別視」は、自分が障害のある人と関わることを想定した際に生じる意識に基づく態度であるものの、項目数が 2 項目であり信頼性分析における α 係数も低いことから、除外した。第 II 因子「関わりの当惑」、第 III 因子「関わりの回避」が、本研究で想定している心理的態度を表していると考え、採用した。また、本研究で視聴する作品で取りあげられている障害は肢体不自由であることから、作品視聴の影響が分かりやすくなるよう、各項目の「障害のある人」を「手足が不自由な人」とした。「関わりの当惑」は、①「手足が不自由な人を見ると手を貸すことができる。」②「手足が不自由な人にも気軽に声をかけられる。」③「手足が不自由な人と抵抗なく話ができる。」④「手足が不自由な人が困っているとき迷わず援助することができる。」⑤「手足が不自由な人にためらいなく、ものをたずねることができる。」⑥「手足が不自由な人を自分達の仲間に入れることに抵抗はない」の 6 項目であった。「関わりの回避」は、⑦「手足が不自由な人と友人になりたい。」⑧「手足が不自由な人に関心がある。」⑨「手足が不自由な人と一緒に仕事がしてみたい。」⑩「手足が不自由な人と積極的に交流したい。」の 4 項目であった。それぞれ、「非常に反対」「かなり反対」「どちらかと言えば反対」「どちらとも言えない」「どちらかと言えば賛成」「かなり賛成」「非常に賛成」の 7 件法で回答を求めた。項目の得点が高い方が、好意的であると解釈される。

4) 潜在的態度：潜在的態度の測定は、心理学の研究で広く用いられている IAT の手法を用

Table1 IAT に用いたカテゴリーと刺激

| カテゴリー | 概念カテゴリー | | 属性カテゴリー | |
|-------|---|---|---------|------|
| | 健常者 | 肢体不自由者 | 接近 | 回避 |
| 刺激 |  |  | 近づく | 避ける |
| |  |  | 望む | 逃げる |
| |  |  | 求める | 離れる |
| |  |  | 寄る | 遠ざける |
| | | | 関わる | 除く |

いた。本研究では、一般社団法人日本経験サンプリング法協会 (JESMA) が提供する psychexp で IAT を作成した。psychexp は Web ブラウザ上で IAT の課題を作成できるソフトであり、反応時間や反応の正誤について自動で記録し出力される。実験は同一のタブレット端末を用いて行った。実験で用いたカテゴリーは、Derbyshire, Spencer, Grosskopf, & Blackmore (2023) および菊池・高橋 (2018) を参考に、概念カテゴリーを「健常者－肢体不自由者」、属性カテゴリーを「接近－回避」とし、2 種類のカテゴリーを決定した。また、健常者と肢体不自由者のカテゴリー分類に使用する刺激として、「健常者」に関連するピクトグラム 4 つ、「肢体不自由者」に関連するピクトグラム 4 つを、フリーのイラストダウンロードサイト (silhouetteAC) から選定した。さらに、第一著者と第二著者の協議の上、接近と回避に分類される刺激として、菊池・高橋 (2018) が用いた 10 語から、5 語を選出した。具体的には、接近の刺激語 (5 語) は、「近づく」、「望む」、「求める」、「寄る」、「関わる」であり、回避の刺激語 (5 語) は、「避ける」、「逃げる」、「離れる」、「遠ざける」、「除く」を選定した (Table1)。

5) 手続き：1 回の実験につき、1～4 人の研究協力者を対象とした。研究協力者は、実験についての概要の説明を受け、作品視聴前に、顕在的態度を測定するための質問紙への回答と潜在的態度を測る IAT を行った (Pre テスト)。Pre テスト実施後に、作品 A または作品 B の視聴を行った。作品視聴後、視聴前と同様に質問紙への回答と IAT を行った (Post テスト)。実験全体の所要時間は約 30 分程度であった。

6) IAT の手続き：研究協力者は、画面上の指示に従って IAT を実施した。画面中央に呈示された単語やピクトグラムが、画面の右側または左側に表示されるカテゴリーのどちらかにあてはまるかを判断し、左側のカテゴリーにあてはまる場合は、「左」のキーを、右側のカテゴリーにあてはまる場合は「右」のキーをできるだけ早く、かつ正確にタップするように求められた。誤反応時 (正答と逆のキーをタップした時) には、画面上に「×」が表示され、正答するまで次の画面には進めなかった。IAT の具体的な手続きを Table2 に、画面の模式図を Figure1 に示す。ブロック 1 (16 試行) は概念分類の練習であり、画面左側に呈示された「健常者」カテゴリーに関する刺激語は「左」キーで、画面右側に呈示された「肢体不自由者」カテゴリーに関する刺激語は「右」キーで分類を求めた。ブロック 2 (16 試行) は属性分類の練習であり、

Table2 IAT の施行手続き

| ブロック | 内容 | 対となる概念 | 試行数 |
|------|---------|------------------|-----|
| 1 | 概念カテゴリー | 健常者－肢体不自由者 | 16 |
| 2 | 属性カテゴリー | 接近－回避 | 16 |
| 3 | 組み合わせ1 | 健常者＋接近－回避＋肢体不自由者 | 18 |
| 4 | 組み合わせ1 | 健常者＋接近－回避＋肢体不自由者 | 36 |
| 5 | 概念カテゴリー | 肢体不自由者－健常者 | 16 |
| 6 | 組み合わせ2 | 接近＋肢体不自由者－回避＋健常者 | 18 |
| 7 | 組み合わせ2 | 接近＋肢体不自由者－回避＋健常者 | 36 |

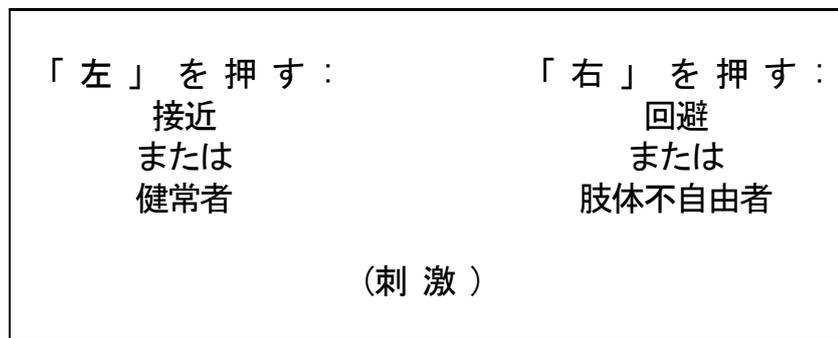


Figure1 IAT 画面の模式図

ブロック 1 と同様の手続きで「接近」と「回避」の分類を求めた。ブロック 3 (18 試行) およびブロック 4 (36 試行) は、ブロック 1 とブロック 2 の刺激語を組み合わせた課題であり、画面左側に「健常者」と「接近」が示され、画面右側に「肢体不自由者」と「回避」が呈示され、分類を求めた。ブロック 5 (16 試行) は左右位置の変更による反応キー操作の慣れを目的とするものであり、画面左側に「肢体不自由者」カテゴリー、画面右側に「健常者」カテゴリーが呈示され、回答を求めた。ブロック 6 (18 試行)、ブロック 7 (36 試行) はブロック 3、ブロック 4 の概念と属性の連合を入れ替えた課題であった。なお、半数の参加者は、カウンターバランスをとるために、ブロック 6、7 のブロック課題を先に行い、ブロック 3、4 のブロック課題を後に行った。

データの処理にあたっては、土居・川西 (2016) に示されている方法でデータの前処理および D スコアの算出を行った。D スコアとは、Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) が開発した IAT の指標であり、本研究においては、D スコアが高いほど、「肢体不自由者」よりも「健常者」に対して心理的に近く、D スコアが低いほど、「健常者」よりも「肢体不自由者」に対して心理的に近いことを示す。

7) 倫理的配慮

参加者に対しては十分な説明を行ったうえで、研究参加は任意であること、研究のいかなる段階においても協力を撤回できること、データは匿名化され研究目的以外には使用されないことを伝え、書面で同意を得た。また、本研究は大分大学教育学部研究倫理審査委員会における倫理審査の承認を受けている (承認番号 R5-010)。

Table3 各尺度の相関係数

| | | Pre | | | Post | | |
|------|--------------|--------|--------|-----------------|--------|--------|-----------------|
| | | 関わりの当惑 | 関わりの回避 | 潜在的態度 (Dスコア) | 関わりの当惑 | 関わりの回避 | 潜在的態度 (Dスコア) |
| Pre | 関わりの当惑 | | .35 * | .17 | .86 ** | .36 * | .07 |
| | 関わりの回避 | | | .49 ** | .53 ** | .88 ** | .24 |
| | 潜在的態度 (Dスコア) | | | | .24 | .37 | .18 |
| Post | 関わりの当惑 | | | | | .60 ** | .07 |
| | 関わりの回避 | | | | | | .24 |
| | 潜在的態度 (Dスコア) | | | | | | |

* $p < .05$ ** $p < .01$

3 結果

1) 顕在的態度と潜在的態度の関連：顕在的態度と潜在的態度の関連を検討するため、研究協力者 40 名の Pre テスト時点の顕在的態度と潜在的態度について相関分析を行った。その結果、Pre テスト時点における「関わりの回避」因子と IAT の D スコアとの間で有意な中程度の相関があった ($r = .49, p = .001$)。「関わりの当惑」因子と IAT の D スコアとの間で有意な相関はなかった ($r = .17, p = .287$)。また、Post テスト時点においては、顕在的態度の 2 因子と D スコアとの間に有意な相関はなかった（「関わりの当惑」： $r = .07, p = .668$ ；「関わりの回避」： $r = .24, p = .131$ ）。各尺度の相関を Table3 に示す。

2) 作品視聴前後における心理的態度の比較：まず初めに、作品視聴前に各尺度の得点に差が見られていないかを確認するため、視聴作品を独立変数、顕在的態度の各平均点および潜在的態度の D スコアを従属変数として t 検定を行った。その結果、いずれの指標においても有意な差は得られなかった（「関わりの当惑」： $t(38) = -0.75, p = .461, d = .23$ ；「関わりの回避」： $t(38) = -1.12, p = .268, d = .36$ ；D スコア： $t(38) = 0.26, p = .799, d = .08$ ）。したがって、感動表現群と自然表現群で肢体不自由者への心理的態度に大きな差はないと言えることから、その後の分析に進んだ。

次に、作品 A と作品 B の視聴前後で心理的態度に変化が生じるかを明らかにするため、作品（感動表現群・自然表現群）を被験者間要因、動画視聴の時期（Pre・Post）を被験者内要因とする 2 要因混合分散分析を行った。その結果、顕在的態度における「関わりの当惑」においては、交互作用は有意ではなかった ($F(1, 38) = 0.65, p = .425$, 偏 $\eta^2 = .02$)。主効果については、時期において有意な差が得られ ($F(1, 38) = 16.25, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .30$)、作品においては有意な差は得られなかった ($F(1, 38) = 0.99, p = .327$, 偏 $\eta^2 = .03$)。同様に、「関わりの回避」においても、交互作用は有意ではなかった ($F(1, 38) = 0.18, p = .671$, 偏 $\eta^2 = .01$)。主効果については、時期において有意な差が得られ ($F(1, 38) = 27.94, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .42$)、作品においては有意な差は得られなかった ($F(1, 38) = 1.49, p = .230$, 偏 $\eta^2 = .04$)。潜在的態度の指標である D スコアにおいては、交互作用および主効果のいずれも有意な差は得られなかった（交互作用： $F(1, 38) = 1.51, p = .227$, 偏 $\eta^2 = .04$ ；時期： $F(1, 38) = 0.15, p = .700$, 偏 $\eta^2 = .00$ ；作品： $F(1, 38) = 0.43, p = .517$, 偏 $\eta^2 = .01$)。顕在的態度及び潜在的態度の基本統計量および分散分析の結果を Table4 に示す。

Table4 作品×時期の2要因混合分散分析結果

| | N | 作品 | Pre | Post | 交互作用 (F) (偏 η^2) | 主効果 | |
|--------|----|-------|-------------|-------------|------------------------------|-----------------------|------------------------|
| | | | M(SD) | M(SD) | | 群(F) (偏 η^2) | 時期(F) (偏 η^2) |
| 顕在的態度 | | | | | | | |
| 関わりの当惑 | 20 | 感動表現群 | 5.42 (1.05) | 5.67 (1.04) | 0.65 | 0.99 | 16.25*** |
| | 20 | 自然表現群 | 5.63 (0.77) | 6.01 (0.80) | .02 | .03 | .30 |
| 関わりの回避 | 20 | 感動表現群 | 4.95 (0.91) | 5.38 (1.18) | 0.18 | 1.49 | 27.94*** |
| | 20 | 自然表現群 | 5.33 (1.19) | 5.83 (1.12) | .01 | .04 | .42 |
| 潜在的態度 | | | | | | | |
| Dスコア | 20 | 感動表現群 | 0.57 (0.51) | 0.50 (0.48) | 1.51 | 0.43 | 0.15 |
| | 20 | 自然表現群 | 0.54 (0.46) | 0.68 (0.34) | .04 | .01 | .00 |

*** $p < .001$

4 考察

1) 障害のある人に対する顕在的態度と潜在的態度の関連：相関分析の結果、Preテストにおいて、「関わりの当惑」とDスコア間に有意な相関はみられず、「関わりの回避」とDスコア間に中程度の相関がみられた。自己報告とIATの相関についてのメタ分析によれば、母集団相関の90%信頼区間は.011～.471であり(Hofmann, Gawronski, Gschwendner, Le, & Schmitt, 2005)、これらの幅は、社会的望ましさの影響などの要因によって生じていると考えられている。本研究で測定した肢体不自由者への態度については、ある程度社会的望ましさの影響が働くと考えられ、中程度の相関が得られることは潜在的態度の指標としてIATが適切である可能性を高めている。一方で、Postテスト時点のDスコアはいずれの指標とも相関が見られなかった。PreテストのDスコアとPostテストのDスコアにはある程度相関があることが本来予想される。したがって、PostテストのDスコアには、本来の潜在的態度以外の要因が影響した可能性がある。具体的には、10分程度の動画視聴の前後という短いスパンにおいてIATを実施していることから、練習効果が働いてしまい、Preテストと違いが生じた可能性がある。

2) 作品視聴前後の心理的態度の変化：感動を喚起するよう編集している作品Aと当事者の意見を踏まえ、自然な様子を多く取り入れるよう編集している作品Bの視聴前後で心理的態度に変化が生じるかを検討した。その結果、顕在的態度の「関わりの当惑」および「関わりの回避」どちらにおいても、時期の主効果が有意であり、視聴前よりも視聴後にポジティブな方向への変化が見られた。また、効果量の指標である偏 η^2 は値が大きいほど効果が大きいことを示しており、.14程度が大きい効果の目安とされている(Richardson, 2011)。「関わりの当惑」と「関わりの回避」の偏 η^2 はそれぞれ.30、.42であったことから、どちらも大きい効果であると解釈される。感動表現群が視聴した作品Aは、悲しげなBGMや厳かなナレーションが用いられており、当事者の苦悩が強調され、感動を誘発するような編集であった。また、自然表現群が視聴した作品Bは、感動を誘発するような編集は少なく、当事者の普段の様子や生活の中での自然なヘルパーとのコミュニケーションなど、日常に近い様子を多く編集していた。作品Aでは、当事者に対する尊敬や同情的態度が、作品Bでは親近感や友好的態度がそれぞれ高まったことが、両因子の得点の変化につながったのではないかと推察される。このことは、障害のある人への心理的態度をポジティブな方向に変化するために、必ずしも感動的な表現が必要で

ないことを示唆している。障害理解教育の観点からは、障害のある人の困難性や苦悩、それを克服する態度を強調しなくても、日常やコミュニケーションの様子などを多く伝えるような表現で十分効果的であると考えられる。また、効果量の高さからは、1回の視聴経験でも心理的態度に大きな変化が生じたことが推察される。したがって、障害理解教育などの場面で動画視聴を行うことは、顕在的態度の変化においては有効であると推察される。

一方、潜在的態度の指標であるDスコアについては、交互作用および主効果が有意ではなかった。このことから、動画視聴は表現の違いに関わらず、潜在的態度を変化させなかったと考えられる。これにはいくつかの理由が考えられる。一つは、潜在的態度のような無意識レベルの心理的な変化は短時間の動画視聴では生じない可能性である。花房・小川・嶋田(2021)は映画鑑賞を通してハンセン病への潜在的差別意識が変化するかを実験しており、34分程度の動画視聴の後に運動課題を行った上でIATを行うという手続きを用いた。その結果、差別意識が低減した被験者は8名、増加した被験者は10名という結果であり、一貫した結果は得られなかった。本研究ではさらに短い10分程度の作品視聴であることから、潜在的な心理的变化が生じるまでには至らなかったのではないかと考えられる。また、IATを短い時間の間に2回行ったことで、練習効果等の要因が加わり、さらにDスコアにばらつきが生じた可能性もある。上記のような問題を改善するためには、同じ傾向で編集された作品を中期的なスパンで視聴するようなスケジュールを立て、潜在的な心理的態度を確かめるような手続きが必要であるかもしれない。

3) 今後の課題：本研究の限界として、今回扱った作品は、肢体不自由者のみを対象としており、他の障害種においても検討が必要である。例えば、強度行動障害のような、対応に高度な専門性が求められるような障害の場合、動画視聴程度では心理的態度に改善が見られない可能性もある。その場合、より専門的な理解と共に実態を伝えるような工夫が求められるかもしれない。また、今回測定した変数は、自分が障害のある人と関わることを想定した際に生じる意識に基づく態度であったが、感動的な表現によって、障害のある人へのイメージが美化されることも想定される。本研究ではイメージの変化に基づく心理的態度のみを検討したが、イメージそのものについても検討することで、表現上の違いがもたらす影響を明らかにできると考えられる。

付記：本研究の素材となる動画を作成された立命館大学卒業生の「みぞうち一む」の皆様、動画の使用許可をいただいた立命館大学国際関係学部教授の白戸圭一先生、そして、本研究にご協力いただいた研究協力者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は第二著者が提出した卒業研究のデータを元に執筆したものです。

注

1) 本作品は立命館大学卒業生の「みぞうち一む」によって2021年に自主制作された動画である。

文献

- Derbyshire, D. W., Spencer, A. E., Grosskopf, B., & Blackmore, T. (2023). The importance of disability representation to address implicit bias in the workplace. *Frontiers in rehabilitation sciences, 4*, 1048432. <https://doi.org/10.3389/fresc.2023.1048432>
- Dickter, C. L., Burk, J. A., Anthony, L. G., Robertson, H. A., Verbalis, A., Seese, S., Myrick, Y., & Anthony, B. J. (2021). Assessment of Sesame Street online autism resources: Impacts on parental implicit and explicit attitudes toward children with autism. *Autism : the international journal of research and practice, 25*(1), 114–124. <https://doi.org/10.1177/1362361320949346>
- 土居 淳子・川西 千弘 (2016). 拡散モデルに基づく潜在的連合テストデータの分析. 京都光華女子大学研究紀要, 54, 31-42.
- Gallego, A. G., Ferreira, C., & Arias-Gago, A. R. (2025). Stereotyped Representations of Disability in Film and Television: A Critical Review of Narrative Media. Preprints. <https://doi.org/10.20944/preprints202508.0047.v1>
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*(6), 1464–1480. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.74.6.1464>
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of personality and social psychology, 85*(2), 197–216. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.85.2.197>
- Greenwald, A. G., Poehlman, T. A., Uhlmann, E. L., & Banaji, M. R. (2009). Understanding and using the Implicit Association Test: III. Meta-analysis of predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology, 97*(1), 17–41. <https://doi.org/10.1037/a0015575>
- 花房 柚祐・小川 有希子・嶋田 総太郎 (2021). 映画鑑賞による潜在的差別意識の変化についての検討. 日本認知科学会第 38 回大会発表論文集, 349-352.
- 林 慎吾・岡田 有司 (2020). 発達障害理解教育を通じた大学生の発達障害に対する態度変容—顕在的及び潜在的指標に注目して—. 障害理解研究, 20, 1-13.
- Hofmann, W., Gawronski, B., Gschwendner, T., Le, H., & Schmitt, M. (2005). A meta-analysis on the correlation between the implicit association test and explicit self-report measures. *Personality & social psychology bulletin, 31*(10), 1369–1385. <https://doi.org/10.1177/0146167205275613>
- 川野 美沙季・石川 須美子・遠矢 浩一 (2024). 「障害」のマスメディア情報に対する障害当事者の意識性—感動ポルノに着目して—. 別府大学大学院紀要, 26, 23-33.
- 菊池 瑠衣・高橋 史 (2018). ポジティブかつ回避的態度の測定: 顕在的指標と潜在的指標の比較. 信州心理臨床紀要, 17, 41-50.
- 栗田 李佳・楠見 孝 (2014). 障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望, 教育心理学研究, 62, 64-80.
- 内閣府 (2023). 障害者に関する世論調査. 内閣府政府広報室. <https://survey.gov-online.go.jp/r04/r04-shougai/gairyaku.pdf> (2025年10月21日最終閲覧)
- Richardson, J. T. E. (2011). Eta squared and partial eta squared as measures of effect size in educational research. *Educational Research Review, 6*(2), 135–147.
- 徳田 克己 (1990). 聴覚障害者に対する態度変容における映像法の効果. 心身障害学研究, 15(2), 1-9.
- 好井 裕明 (2022). 「感動ポルノ」と向き合う: 障害者像にひそむ差別と排除. 岩波書店, 東京都.
- Young, S. (2014). *I'm not your inspiration, thank you very much* [Video]. TEDxSydney. https://www.ted.com/talks/stella_young_i_m_not_your_inspiration_thank_you_very_much.

〈2025年10月21日 最終閲覧〉

渡邊 照美・青山 芳文・稲富 まどか (2016). 障害児・者との接触経験の時期および内容と障害児・者に対する態度との関連について, 教職支援センター紀要, 7, 11-28.

(2025年12月11日学内審査終了)

The Effect of Differences in Representation in Audiovisual Works Addressing Disabilities on Psychological Attitudes toward People with Disabilities

KOCHO, Haruki. and MARUO, Momoka.

Abstract

This study examined the effects of differences in representations in audiovisual works addressing disabilities on psychological attitudes toward people with disabilities. Forty university students were divided into two groups and viewed either a work employing emotionally evocative representations designed to elicit emotional responses from viewers or a work emphasizing natural representations focusing on the everyday life of people with disabilities. Changes in explicit and implicit attitudes toward people with disabilities before and after viewing were then compared using questionnaires and the Implicit Association Test (IAT). The results indicated that both emotionally evocative representations and representations emphasizing naturalness had a positive effect on explicit attitudes. In contrast, no changes in implicit attitudes were observed before and after viewing, regardless of the type of representation. These findings suggest that while different types of representation may shape positive images of people with disabilities and lead to more favorable explicit attitudes, exposure to audiovisual works alone may be insufficient to produce changes in implicit attitudes.

【Key words】 Disability, Inspiration Porn, Implicit Attitudes, Explicit Attitudes, IAT